

桃太郎

楠山正雄

青空文庫

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。まいにち、おじいさんは山へしば刈りに、おばあさんは川へ洗濯せんたくに行きました。

ある日、おばあさんが、川のそばで、せっせと洗濯せんたくをしていますと、川上かわかみから、大きな桃ももが一つ、

「ドンブラコッコ、スッコッコ。」

ドンブラコッコ、スッコッコ。」

と流ながれて来きました。

「おやおや、これはみごとな桃ももだこと。おじいさんへのおみやげに、どれどれ、うちへ持もつて歸かえりましょう。」

おばあさんは、そう言いながら、腰こしをかめて桃ももを取とろうとしました。遠とおくつて手がとどきません。おばあさんはそこで、

「あっちの水みいずは、かあらいぞ。

こっちの水みいずは、ああまいぞ。

かあらい水みいずは、よけて来こい。

ああまい水みいずに、よつて来こい。

と歌うたいながら、手をたたきました。すると桃ももはまた、

「ドンブラコッコ、スッコッコ。」

ドンブラコッコ、スッコッコ。」

といいながら、おばあさんの前まえへ流ながれて来きました。おばあさんはにこにこしながら、

「早くおじいさんと二人ふたりで分わけて食たべましょう。」

と言いつて、桃ももをひろい上あげて、洗せん濯たく物ものといっしよにたらいの

中いに入れて、えつちら、おつちら、かかえておうちへ帰かえりました。

夕ゆう方がたになつてやつと、おじいさんは山やまからしばを背せ負おつて帰かえ

つて来きました。

「おばあさん、今いま帰かえつたよ。」

「おや、おじいさん、おかいんなさい。待まつていましたよ。さあ、

早はやくお上あがんなさい。いいものを上あげますから。」

「それはありがたいな。何なんだね、そのいいものというのは。」

こういいながら、おじいさんはわらじをぬいで、上に上がりま
した。その間に、おばあさんは戸棚とだなの中からさっきの桃ももを重おもそう
にかかえて来て、

「ほら、ごらんなさいこの桃ももを。」
と言いいました。

「ほほう、これはこれは。どこからこんなみごとな桃ももを買かつて来き
た。」

「いいえ、買かつて来きたのではありません。今日きょう川ひろで拾ひろつて来きたの
ですよ。」

「え、なに、川ひろで拾ひろつて来きた。それはいよいよめずらしい。」
こうおじいさんは言いいながら、桃ももを両りょう手にてのせて、ためつ、

すがめつ、ながめていますと、だしぬけに、桃はほん^{もも}と中から二つに割^われて、

「おぎやあ、おぎやあ。」

と勇^{いさ}ましいうぶ声^{こえ}を上げながら、かわいらしい赤^{あか}さんが元^{げん}気^きよくとび出^だしました。

「おやおや、まあ。」

おじいさんも、おばあさんも、びつくりして、二人^{ふたり}いっしょに声^{こえ}を立て^たました。

「まあまあ、わたしたちが、へいぜい、どうかして子供^{こども}が一人^{ひとり}ほしい、ほしいと言^いっていたものだから、きつと神^{かみ}さまがこの子をさずけて下^{くだ}さったにちがいない。」

おじいさんも、おばあさんも、うれしがって、こう言いました。そこであわてておじいさんがお湯をわかすやら、おばあさんがむつきをそろえるやら、大さわぎをして、赤さんを抱き上げて、うぶ湯をつかわせました。するといきなり、

「うん。」

と言いながら、赤さんは抱いているおばあさんの手をはねのけました。

「おやおや、何という元気のいい子だろう。」
おじいさんとおばあさんは、こう言って顔を見合わせながら、
「あツは、あツは。」とおもしろそうに笑いました。

そして桃の中から生まれた子だということで、この子に桃太郎

という名なをつけました。

二

おじいさんとおばあさんは、それはそれはだいにしてももたろ桃太郎ももたろうを育てました。桃太郎はだんだんせいちょう成長するにつれて、あたりまえの子供こどもにくらべては、ずっと体からだも大きいし、力ちからがばかに強つよくつて、すもうをとつても近きんじよ所の村むらじゆうで、かなうものは一人ひとりもないくらいでしたが、そのくせ気きだてはごくやさしくつて、おじいさんとおばあさんによく孝行こうこうをしました。

桃太郎ももたろうは十五になりました。

もうそのじぶんには、日本の国中で、桃太郎ほど強いものはないようになりました。桃太郎はどこか外国へ出かけて、腕いっぱい、力だめしを試してみました。

するとそのころ、ほうぼう外国の島々をめぐる帰つて来た人があつて、いろいろめずらしい、ふしぎなお話をした末に、

「もう何年も何年も船をこいで行くと、遠い遠い海のはてに、鬼が島という所がある。悪い鬼どもが、いかめしいくろがねのお城の中に住んで、ほうぼうの国からかすめ取った貴い宝物を守っている。」

と言いました。

桃太郎はこの話をきくと、その鬼が島へ行つてみたかつて、

もう居ても立ってもいられなくなりました。そこでうちへ帰るとさつそく、おじいさんの前へ出て、

「どうぞ、わたくしにしばらくおひまを下さい。」
と言いました。

おじいさんはびっくりして、

「お前どこへ行くのだ。」

と聞きました。

「鬼が島へ鬼せいばつに行こうと思ひます。」

と桃太郎はこたえました。

「ほう、それはいさましいことだ。じゃあ行っておいで。」
とおじいさんは言いました。

「まあ、そんな遠方へ行くのでは、さぞおなががおすきだろう。よしよし、おべんとうをこしらえて上げましょう。」

とおばあさんも言いました。

そこで、おじいさんとおばあさんは、お庭のまん中に、えんやら、えんやら、大きな臼を持ち出して、おじいさんがきねを取るど、おばあさんはこねどりをして、

「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ。ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ。」

と、おべんとうのきびだんごをつきはじめました。

きびだんごがうまそうにでき上がると、桃太郎のしたくもすつかりでき上がりました。

桃太郎はお侍の着るような陣羽織を着て、刀を腰にさして、きびだんごの袋をぶら下げました。そして桃の絵のかいてある軍扇を手に持って、

「ではおとうさん、おかあさん、行ってまいります。」
 と言つて、ていねいに頭を下げました。

「じゃあ、りつぱに鬼を退治してくるがいい。」

とおじいさんは言いました。

「気をつけて、けがをしないようにおしよ。」

とおばあさんも言いました。

「なに、大丈夫です、日本一のきびだんごを持っているから

。」と桃太郎は言つて、

「では、ごきげんよう。」

と元気な声げんき こえをのこして、出でていきました。おじいさんとおばあさんは、門もんの外そとに立たって、いつまでも、いつまでも見送みおくつていました。

三

桃太郎ももたろうはずんずん行きますと、大きな山の上かみに来きました。すると、草くさむらの中から、「ワン、ワン。」と声こえをかけながら、犬いぬが一がぴきかけて来きました。

桃太郎ももたろうがふり返かえると、犬いぬはていねいに、おじぎをして、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります。」
とたずねました。

「鬼が島へ、鬼せいばつに行くのだ。」

「お腰に下げたものは、何でございます。」

「日本一のきびだんごさ。」

「一つ下さい、お供しましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来い。」

犬はきびだんごを一つもらって、桃太郎のあとから、ついて
行きました。

山を下りてしばらく行くと、こんどは森の中にはいりました。
すると木の上から、「キャツ、キャツ。」とさげびながら、猿が

一びぎ、かけ下りて来ました。

桃太郎がふり返ると、猿はていねいに、おじぎをして、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります。」

とたずねました。

「鬼が島へ鬼せいばつに行くのだ。」

「お腰に下げたものは、何でございます。」

「日本一のきびだんごさ。」

「一つ下さい、お供しましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来い。」

猿もきびだんごを一つもらつて、あとからついて行きました。

山を下りて、森をぬけて、こんどはひろい野原へ出ました。す

ると空そらの上で、「ケン、ケン。」と鳴なく声こえがして、きじが一羽わとんで来きました。

桃太郎ももたろうがふり返かえると、きじはていねいに、おじぎをして、

桃太郎ももたろうさん、桃太郎ももたろうさん、どちらへおいでになります。」

とたずねました。

鬼おにが島しまへ鬼おにせいばつに行くのだ。」

「お腰こしに下げたものは、何なんでございます。」

「日本にっぽん一のきびだんごさ。」

「一つ下ください、お供ともしましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来こい。」

きじもきびだんごを一つもらって、桃太郎ももたろうのあとからついて

行きました。

犬いぬと、猿さると、きじと、これで三にんまで、いい家来けらいができたので、桃太郎ももたろうはいよいよ勇いさみ立たつて、またずんずん進すすんで行きますと、やがてひろい海うみばたに出来ました。

そこには、ちようどいいぐあいに、船ふねが一いっそうつないでありますした。

桃太郎ももたろうと、三にんの家来けらいは、さつそく、この船ふねに乘のり込みました。

「わたくしは、漕こぎ手てになりましたよ。」
 こう言いつて、犬いぬは船ふねをこぎ出だしました。

「わたくしは、かじ取とりになりましたよ。」

こう言つて、猿がかじに座りました。

「わたくしは物見をつとめましょう。」

こう言つて、きじがへさきに立ちました。

うらかなないお天気で、まっ青な海の上には、波一つ立ちま
 せんでした。稲妻が走るようだといいおうか、矢を射るようだと
 いうおうか、目のまわるような速さで船は走つて行きました。ほん
 の一時間も走つたと思ふころ、へさきに立つて向こうをながめて
 いたきじが、「あれ、あれ、島が。」とさけびながら、ぱたぱた
 と高い羽音をさせて、空にとび上がったと思ふと、スウツとまっ
 すぐに風を切つて、飛んでいきました。

桃太郎もすぐきじの立つたあとから向こうを見ますと、なる

ほど、遠い遠い海のはてに、ぼんやり雲のような薄ぐろいものが見えました。船の進むにしたがつて、雲のように見えていたものが、だんだんはつきりと島の形になつて、あらわれてきました。

「ああ、見える、見える、鬼が島が見える。」

桃太郎がこういうと、犬も、猿も、声をそろえて、「万歳、

万歳。」とさげびました。

見る見る鬼が島が近くなつて、もう硬い岩で畳んだ鬼のお城が見えました。いかめしいくろがねの門の前に見はりをしている鬼の兵隊のすがたも見えました。

そのお城のいちばん高い屋根の上に、きじがとまつて、こちらを見ましました。

こうして何年も、何年もこいで行かなければならないという
鬼が島へ、ほんの目をつぶっている間に来たのです。

四

桃太郎は、犬と猿をしたがえて、船からひらりと陸の上にと
び上がりました。

見はりをしていた鬼の兵隊は、その見なれないすがたを見る
と、びっくりして、あわてて門の中に逃げ込んで、くろがねの門
を固くしめてしまいました。その時犬は門の前に立って、

「日本の桃太郎さんが、お前たちをせいばいにおいでになった

のだぞ。あける、あける。」

とどなりながら、ドン、ドン、扉とびらをたたきました。鬼おにはその声こえを聞きくと、ふるえ上があって、よけい一生懸命いっしょうけんめいに、中から押おさえていました。

するときじが屋根やねの上からとび下おりてきて、門もんを押おさえている鬼おにどもの目をつつきまわりましたから、鬼おにはへいこうして逃にげ出だしました。その間まに、猿さるがするすると高たかい岩壁いわかべをよじ登のぼって、ぞうさなく門もんを中からあけました。

「わあッ。」とときの声こえを上げて、桃太郎ももたろうの主従しゅじゆうが、いさましくお城しろの中に攻め込こんでいきますと、鬼おにの大將たいしょうも大ぜいの家来けらいを引き連つれて、一人一人ひとりひとり、太ふとい鉄てつの棒ぼうをふりまわしながら、

「おう、おう。」ときけんで、向むかつてきました。

けれども、体からだが大きいばかりで、いくじのない鬼おにどもは、さ
んざんきじに目をつつかれた上に、こんどは犬いぬに向むこうずねをく
いつかれたといつては、痛いたい、痛いたいと逃げまわり、猿さるに顔かおを引ひ
かかれたといつては、おいおい泣なき出だして、鉄てつの棒ぼうも何なにもほうり
出だして、降こう参さんしてしまいました。

おしまいまでがまんして、たたかっていた鬼おにの大たい将しょうも、と
うとう桃もも太郎たろうに組くみふせられてしまいました。桃もも太郎たろうは大き
な鬼おにの背せ中なかに、馬うま乗のりりにまたがって、

「どうだ、これでも降こう参さんしないか。」

といつて、ぎゆうぎゆう、ぎゆうぎゆう、押おさえつけました。

鬼の大将は、桃太郎の大力で首をしめられて、もう苦しくつてたまりませんから、大つぶの涙をぼろぼろこぼしながら、「降参します、降参します。命だけはお助け下さい。その代わりに宝物をのこらずさし上げます。」

こう言つて、ゆるしてもらいました。

鬼の大将は約束のとおり、お城から、かくれみのに、かくれ笠、うちでの小づちに如意宝珠、そのほかさんごだの、たいまいだの、るりだの、世界でいちばん貴い宝物を山のように車に積んで出しました。

桃太郎はたくさんの宝物をのこらず積んで、三にんの家来といっしょに、また船に乗りました。帰りは行きよりもまた一

そう船ふねの走はしるのが速はやくつて、間まもなく日本にほんの国くにに着つきました。
 船ふねが陸おかに着つきますと、宝たからもの物ものをいつぱい積つんだ車くるまを、犬いぬが先さき
 に立たつて引ひき出だしました。きじが綱つなを引ひいて、猿さるがあとを押おしま
 した。

「えんやらさ、えんやらさ。」

三おもにんは重おもそうに、かけ声こゑをかけかけ進すすんでいきました。

うちではおじいさんと、おばあさんが、かわるがわる、

「もう桃もも太郎たろうが帰かえりそうなものだが。」

と言いい言いい、首くびをのばして待まっていました。そこへ桃もも太郎たろうが

三おもにんのりっぱな家来けらいに、ぶんどりの宝たからもの物ものを引ひかせて、さも

とくいらしい様ようす子すをして帰かえつて来きましたので、おじいさんもおば

あさんも、目も鼻はなもなくして喜よろこびました。

「えらいぞ、えらいぞ、それこそ日本にっぽん一だ。」

とおじいさんは言いいました。

「まあ、まあ、けががなくって、何なによりさ。」

とおばあさんは言いいました。

桃太郎ももたろうは、その時とき犬いぬと猿さるときじの方ほうを向むいてこう言いいました。

「どうだ。鬼おにせいばつはおもしろかったなあ。」

犬いぬはワン、ワンとうれしそうにほえながら、前まえ足あしで立たちまし

た。

猿さるはキャツ、キャツと笑わらいながら、白しろい歯はをむき出だしました。

きじはケン、ケンと鳴なきながら、くるくると宙ちゆう返がえりをしま

した。
空^{そら}は青^{あお}々^{あお}と晴^はれ上^あが^あつて、
お庭^{にわ}には桜^{さくら}の花^{はな}が咲^さき乱^{みだ}れていま
した。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

※「そのお城《しろ》のいちばん高《たか》い」「こうして何年《なんねん》も」の行頭が下がっていないのは底本のままです。

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月27日作成

2013年10月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桃太郎

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>